



竹田 英司

24歳の井上航選手と、46歳の私は妙に波長が合う。合い過ぎてけんかが絶えない。

「航! おまえ、誰にもの言いうるか、わかつちよるんか!」。私が出身地の山口弁で怒鳴ると、航選手はうそぶいてくる。「おお、さすがは先生、高校時代に戻った気分だ」

先日は事務所にいた私に彼が近づいてきた。また冷やかしに来たなど身構えていると、意外なこと



バレーボール教室で
笑顔を見せる井上航
選手 (9日)

航選手 苦勞垣間見た

を言い始めた。「先生、俺、思うんすけど、好きなことで飯を食っていける人なんてほんの一握り。つらくても仕事は仕事として、きっちりしなくちゃいけないと思うんすよ」

実はその日、私は選手に良かれと思つてした行動が裏目に出て、ふてくされながら作業をしていた。私は感情を隠せず、口をへんの字に曲げていた。そのただならぬ姿に航選手は感じたことがあったのだろう。普段は決して口にしないような言葉で私を励ましてくれた。

「おまえみたいに好きなことを職業にしているやつに、そんなことを言われても説得力がないぞ」。照れ隠しもあつて、そう言う航選手は反論してきた。

「俺だつてつらいことはあります。バレーだつて昔は楽しかったけど、今は結果を出さないといけないじゃないすか、つらいっす」航選手のポジションは守備専門のリベロ。瞬時の判断力と敏しいう性が要求され、ミスを自らの得点で挽回することができないストレスのかかるポジションだ。彼の言葉に、ここまで上り詰めてきた理由とこれまでの苦勞を垣間見た気がした。(JTマネジャー)